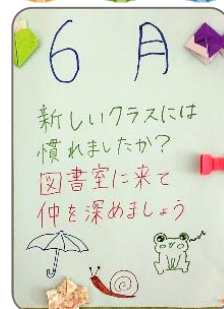




6月というのに早くも夏本番のような暑さと、むしむしとした梅雨空が続いており、体調管理の難しい季節となりました。そんな中、昼休みにはたくさんの川高図書館を利用している人を目にしますが、図書の貸出数は昨年よりも若干少ないようです。特に3年次生は進路に向けて忙しい時期だとは思いますが、総体も終わったこの時期に、朝読書とは違う一冊を読んでみてはどうでしょうか。



【新任の先生より】

「足るを知る」の私の考え — 森 鷗外『高瀬舟』 —

数学科 宮本 岩夫 先生



この小説には、「足るを知ること」と「安楽死」の二つのテーマが提起されている。

「高瀬舟」とは、遠島を申し渡された罪人を乗せ、京都の高瀬川を大阪まで渡る舟である。今夜の高瀬舟には、弟殺しの罪人喜助と護送する羽田庄兵衛が乗っている。喜助は、弟殺しの罪を認めて牢に入り、遠島になることを悲しむことなく受け入れた。私が喜助なら「私は弟を殺していない!!」と、抵抗し、もがき、悲しみ、不安に落ち込み、世の中の不条理に激怒し、自暴自棄になって生きる望みさえも絶つかも知れない。

しかし、喜助は全てのものを受け入れて未来に希望をもって生きる道を選んだ。罪人となったことにより、島で暮らしていくという居場所ができた。また、島での仕事の元手にできる財産（二百文）も手に入れた。懷を温める裕福さを感じ、今までにない幸福を手に入れたことに感謝さえしているのである。喜助の話聞いた庄兵衛にとって、「足るを知る」ことを自分にはどうしてもできないことだった。それは神の域だと思えたから、罪人である喜助を後光が差すように思えたのである。喜助は、なぜ「足るを知る」ができたのだろう。喜助は究極の苦勞をしてきたから「これまでわたくしが経験した苦しみはどこにもないと思います。」と話した言葉にあるように思う。また、喜助が感じる全ての事と全ての物を受け入れることができる強い広い心を持つことができたからに違いない。そうして喜助が得た幸福は、弟が今まで兄に苦勞をかけた分、今度は兄に楽しめてもらいたいと天国から願う弟の命を懸けた贈り物であったのかも知れない。

そう考えると『高瀬舟』は、足るを知って幸福を手に入れた喜助の言動を通して、鷗外の幸福論が述べられているように思う。



〔図書紹介〕

『舟を編む』（三浦 しをん 著）

『舟を編む』という作品を知っていますか？

2012 年本屋大賞を受賞するとともに、2013 年松田龍平主演で映画化、2016 年テレビアニメが放送されました。さらに2024 年池田エライザ主演で「舟を編む ～私、辞書をつくります～」として全 10 話でテレビドラマ化もされ、BS プレミアムの「プレミアムドラマ」で放送されました。今月からNHK 総合地上波で放送が開始されたばかりなので、そちらのほうで見たことのある人もいられるかもしれません。なお、愛媛県の高校入試の国語の問題として採用されたこともありました。

原作は、主人公の馬締光也（まじめみつや）が、新しく刊行する辞書の編纂メンバーとして辞書編集部へ異動になり、辞書の世界に没頭していく姿を描いており、映画も原作に沿った内容となっています。一方テレビドラマでは原作の主人公馬締ではなく、新入り社員の岸辺みどりの視点で描く、まったく新しい物語となっています。

このように、小説をドラマ化したものは原作と大いに違っているものがよくありますね。このテレビドラマはまだ始まったばかりですので、興味のある人はテレビを視聴するとともに、原作にもぜひ挑戦してみてください。川高図書館にも一冊あります。



〔5 月 月間図書貸出冊数〕

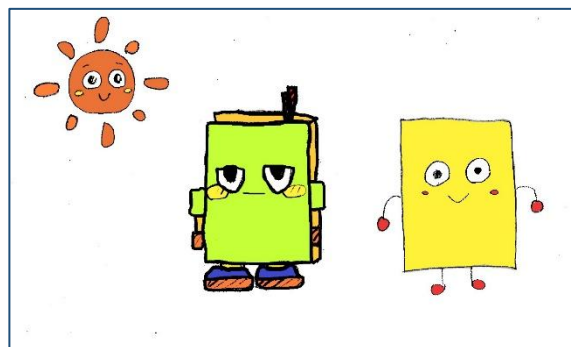
〈クラス別〉

5月1日～5月31日

1-1	1-2	2-1	2-2	3-1	3-2	3-3	合 計
26冊	19冊	14冊	17冊	4冊	4冊	0冊	84冊

〈個人別〉

- 1 位 4冊 笹方 愛琉（1-1）
 4冊 濱本 詩音（2-1）
 4冊 吉本 陽向（2-1）
 4冊 宇都宮 妃南（3-2）



「広い世界への鍵となるのは本である。

もし他に何もできないのなら、出来るだけ本を読みなさい。」

アメリカの小説家、ジェーン・ハミルトン（1957 年生まれ）